

## ナショナリズムとジェンダー：1917-36年における黒龍会を例として

### 「男の道」に就いて：『亜細亜時論』と The Asian Review の 武士道ディスクール（1917-21）

ハイデルベルク大学

B.D. ビンダー

(B.D. Binder)

#### 概要

本研究は、ナショナリスティックな黒龍会を事例としてとりあげ、国家思想がどのようなマスキュリニティの思想と結びついたかを研究する。黒龍会の多言語的な機関紙と内田良平（1874-1937）の出版物の中から選択した資料を基に、マスキュリニティが国家の名のもとにどのように作られてきたか、またそれが黒龍会の社会思想にどのような影響を与えてきたかを分析する。研究目的は国家（*n a t i o n*）とマスキュリニティの1917年から1937年までの論弁的な関連を分析し、今日にいたっても痕跡を残しているコンフィギュレーションの日本という「国家」の発展に対する歴史上の特性を明らかにしようとするものである。

... the wordless body [言葉のない体]

MISHIMA Yukio, SUN & STEEL・1970

#### I 関連性と研究の軌跡

いわゆる「クラシック」なナショナリズム理論の主要なテキストが示すのは、国家形成に伴われるジェンダー化されジェンダー化する形成過程が明確に等閑視されていることである。1980年代半ばから女性解放論者はこのジェンダーレスな立場に対して、ナショナリズムも国家もそれぞれのインテグラルなジェンダーの部分を抜きには十全には理解されないと論証することで挑んできた。内田良平により1901年に組織され、1946年に連合軍総司令官が公式に解体した黒龍会は、日本国内の国粋主義史に重要な役割をになうが、これまでのところ黒龍会のジェンダー化された国粋主義的ディスクールを分析する研究はない。したがって私は博士論文において、現代日本における国家の名のもとにみられる国

粹主義的男性性（マスキュリニティ）のディスクールに焦点を絞って歴史記述の空隙を批判的に充填する。その際私は男性ホモソーシャルな黒龍会（Sven Saaler によれば、“the pan-Asian society par excellence”<sup>1)</sup>）を分析の対象とする。

黒龍会を選んだ主な二つの理由<sup>2)</sup>は、第一にそれがプロトタイプの右翼<sup>3)</sup>であり日本をリーダーとする大亜細亜主義<sup>4)</sup>の最有力な政治結社であるからである。日本がリーダーシップをとるという目標を主張し続ける一方で、黒龍会は日本の民族国家の限界を越える革命的なナショナリズムを促進した。設立の要綱によれば、黒龍会の会員は皇帝や帝国ならびに至上主義的な亜細亜主義と軍国主義への絶対的忠誠心と自己を同一視した。内田の大亜細亜主義の目的は「to enlighten Russia, foster Korea, protect Manchuria and to save China」<sup>5)</sup>である。第二に、黒龍会は大規模の団体ではなかったにもかかわらず（会員数の概算は 60 人から 1000 人とされている）<sup>6)</sup>、日本及び日本国外における政界、軍界、財界のエリートたちをふくむその広範なネットワークが著名であるからである。それはまた過

---

<sup>1)</sup> Sven Saaler 2007: “Pan Asianism in modern Japanese history: overcoming the nation, creating a region, forging an empire”, in: id. and Victor Koschmann (eds.): *Pan-Asianism in Modern Japanese History: Colonialism, Regionalism and Borders*. London, New York: Routledge, 1-18: 4.

<sup>2)</sup> 以下の著者により暴力団に対する黒龍会の原型的重要性が指摘されている。David Herold Stark 1981: *The Yakuza: Japanese Crime Incorporated*. Diss. University of Michigan; Peter B.E. Hill 2003: *The Japanese Mafia. Yakuza, Law, and the State*. Oxford et al.: Oxford University Press; and David E. Kaplan and Alec Dubro 2003: *Yakuza: Japan's criminal underworld*. Expanded Edition. Berkeley et al.: University of California Press.

<sup>3)</sup> Richard Storry 1957: *The Double Patriots. A Study of Japanese Nationalism*. London: Chatto and Windus 1954; John Wayne Sabey 1972: *The Gen'yōsha, the Kokuryūkai, and Japanese expansionism*. Diss. Ann Arbor: Michigan; Wolfgang Seifert 1977: *Nationalismus im Nachkriegs-Japan*. Hamburg: Mitteilungen des Instituts für Asienkunde; 初瀬龍平 1980: 内田良平の研究・伝統的右翼. 福岡: 九州大学出版会.

<sup>4)</sup> Marius B. Jansen 1954: *The Japanese and Sun Yat-sen*. Cambridge, Mass., London: Harvard University Press と Sven Saaler の研究、特に 2002: “Pan-Asianism in Modern Japanese History: A Preliminary Approach”. Tokyo: Deutsches Institut für Japanstudien (DIJ Working Paper 02/4); 2003: „Pan-Asianismus im Japan der Meiji- und der Taisho-Zeit: Wurzeln, Entstehung und Anwendung einer Ideologie“, in: *Selbstbehauptungsdiskurse in Asien: China – Japan – Korea*. München: Iudicium, 127-157; 2007: “Pan Asianism in modern Japanese history”, 1-18.

<sup>5)</sup> Zhao Jun 1992: “Uchida Ryōhei's Activities during the 1911 Revolution”. *Transactions of the International Conference of Orientalists in Japan* 37, 186-188: 187.

<sup>6)</sup> Saaler 2007: “Pan Asianism in modern Japanese history”, 14.

激な出版活動で有名でもあるホモソーシャルな圧力団体なのである<sup>7</sup>。本発表は、黒龍会の『亜細亜時論』と *The Asian Review* という機関誌における男性性的な理想としての武士道神話のジェンダー化されたディスコースを分析する。

### I I ジェンダー、マスキュリニティについて

この研究のフレームワークにおいては、ジェンダーという概念は「力」と「知」の基礎範疇として理解される。この範疇は、「階級」や「民族」といった「力」を構成する他の諸範疇と交差するもので、歴史的变化という意味で動的であり、また他の諸ジェンダーに関連するものである。この諸特性は男性性的のディスコースにもあてはまるものであり、これがこの研究の主題である（IV. 参照）。同様にジェンダー化されまた国家化されたアイデンティティは表象（もしくは再現前化）の分析によってのみ接近が可能である。というのも「マスキュリニティ」そのものが存在するわけではなく、男性性は日常で実行されジェンダー化された生と振舞いにおいて表象されるからであり、これらの生と振舞いが「男性的」と徴表づけられるからである。現代世界がより広範な多様性と現状を呈するいま、女性性／男性性という二元論を無自覚に繰り返すことを回避する理念のもと、「武士道の男性性」の表象に焦点を当てて議論していきたい<sup>8</sup>。

### III 亜細亜時論と *The Asian Review* の武士道ディスコース (1917-21)

*International Encyclopedia of Men and Masculinities* における “Japanese Masculinities” という項目において伊藤公雄は、武士階級の理念化は相対的に平和な江戸時代の間には発生してきたと書いている。その特徴的な武士的男性性の理念は、明治維新後の民族国家形成の過程で 19 世紀半ばに初めて浸透したものである<sup>9</sup>。仮構された伝統として、この理念は「軍事的徳のアンサンブル」という形で学者らによって創造されたものである。これらの学者らは、むしろ個々の人間として兵士を描き出す既存のイメージに対抗

---

<sup>7</sup> Saaler 2008: 「大正期における政治結社 ― 黒龍会の活動と人脈」, in: 猪木武徳(ed.): 戦間期日本の社会集団とネットワーク. デモクラシーと中間団体. 東京: NTT 出版, 81-108.

<sup>8</sup> Jason G. Karlin 2002: “The Gender of Nationalism: Competing Masculinities in Meiji Japan”. *Journal of Japanese Studies* 28, 41-77: 43.

<sup>9</sup> Itō Kimio 2007: “Japanese Masculinities”, in: Michael Flood, Judith Kegan Gardiner, Bob Pease and Keith Pringle (eds.): *International Encyclopaedia of Men and Masculinities (IEMM)*. London, New York: Routledge, 348-349: 348.

するために、忠義（忠誠心）と規律を強調してきた<sup>10</sup>。武士道は（文字通りには「武／戦士の道」）、いわゆる武士の「倫理規範」、すなわち自己犠牲、忠義、名誉と恥辱、死に直面して恐れないことなど、現代までもディスкурールの的に重要である。しかし、現代までもなお存続する武士道の神話を日本近世のヘジエモニック・マスキュリニティとして選び出すことは正当化されるのであろうか<sup>11</sup>。

明治時代に壮士という現象が発生した。壮士とは、武家出身の若い「不機嫌な」男性で、彼らには“*proclivity of carrying clubs*”という傾向があった。彼らは、政府の方針に反対し、自覚的にむしろ流行遅れに装い振舞った<sup>12</sup>。黒龍会の会員は、壮士の先駆者の伝統の中で、幕末志士とよばれる江戸時代末期の日本人愛国主義者と自らを同一視し、したがって明治時代のジェントルマン流行に逆らったのである<sup>13</sup>。

近世的な武士道のマスキュリニティの神話というものは時間の経過につれて様々な方法で利用された。江戸時代の間は、ただ公的に支配しているだけで非生産的な仕事を行う（徐々に経済的にも社会的も墮落して来た）階級の正当性が認められていた。1876年に公式に武士階級が廃止された後、日本は拡大する西洋の侵略に対抗すべく、軍国主義的ナショナリズムを最終的に正当化するために（もう一度）「サムライの国家」が必要となった<sup>14</sup>。天皇のための忠義に集中する明治武士道の「国家主義の流れ」が明治15年の軍人勅諭には例示された<sup>15</sup>。この中で武士道の中心的価値が議論されており、一般新兵に指示され

---

<sup>10</sup> David L. Davis 1978: “The evolution of bushidō to the year 1500”. *Journal of the Oriental Society of Australia* 13, 38-56, in Morris Low 2003: “The Emperor’s Sons go to War. Competing masculinities in modern Japan“, in: Kam Louie and Morris Low (eds.): *Asian Masculinities. The meaning and practice of manhood in China and Japan*. London et al.: Routledge Curzon, 81-99: 86.

<sup>11</sup> Connell defined “hegemonic masculinity” as a ‘masculine ideal’ in the sense of a historically dynamic relation that does not have to be lived by a majority (and in fact, rarely is) in order to be acknowledged as a pattern of orientation and to seem supposedly ‘natural’. Raewyn W. Connell 2005: *Masculinities*. Second edition. Cambridge: Polity, 2005.

<sup>12</sup> Karlin 2002: “The Gender of Nationalism”, 59.

<sup>13</sup> Eiko Maruko Siniawer 2008: *Ruffians, Yakuza, nationalists. The violent politics of modern Japan, 1860-1960*. Ithaca et al.: Cornell University Press, 52-57.

<sup>14</sup> Marius B. Jansen 2000: *The Making of Modern Japan*. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, p. 399.

<sup>15</sup> 軍人勅諭 (“Imperial Rescript to Soldiers and Sailors”)の英語の翻訳 : Hillis Lory 1943: *Japan’s Military Masters. The Army in Japanese Life*. New York: The Viking Press, 239-245. 本質的な義務に



*History, Arts and Literature*<sup>22</sup> や1904年の「The Soul of a Nation」と題された *The Times London* の記事がある。Times の著者によれば日本軍の成功の理由は武士道の「moral force」「a direct product of very ancient times」である<sup>23</sup>。この民族的に概念化された武士道は日本人の国際主義者らに支持された。例えば金子堅太郎（1853-1942）はセオドア・ルーズベルトに新渡戸の *Bushido* を進呈した。これにより日本がいわゆる「文明化」した諸国にとって対等な相手として相応しいことを西洋の聴衆に確信させるため「国民ブランド化」という形で武士道は促進された<sup>24</sup>。

勇ましく軍国主義的なマスキュリニティの構造のうちで、これらのディスクールは明らかにジェンダー化する一方、決して明示されずに男性あるいは男性性に関係する。このジェンダー化の特性は、伝統的教育（文武）からみても中心的でありつづる。武士はこの伝統的な教育で文武両道に訓練されたといわれる。文武というのは文学（文）と馬術と武道（武）を含んで均整のとれ、学的教養を身につけた男らしく武人的な理想である<sup>25</sup>。

黒龍会の創設者であり会長である内田から引用しよう。これは武士道のジェンダー化のアスペクトを説明するものである。「男を売る道侠客道も浪人道も士道であり、臣民道であり、皇国体に殉ずる道に他ならぬ。（男の道）」<sup>26</sup>。ここで内田は「武士道」ではなく「士道」といい、前述の素行の講義に言及する。武士道術語の特に観念的な基礎をなす限りで武士道ディスクールでは素行の「士道」は鍵テキストとみなされる。「義理」や「義」を強調して武士道は「an actualization of Confucian values through their contact with an inherently Japanese spirit」<sup>27</sup> になった。社会的教育家と治安維持者として武士を再創造する素行の「武士道」に言及し、素行のいう武士の倫理規則に則って、内田はマスキ

---

<sup>22</sup> Ibid., xxxv-xxxvi.

<sup>23</sup> Ibid., xxxv.

<sup>24</sup> Ibid., xxxvi.

<sup>25</sup> Catharina Blomberg 1990: “The Vicissitudes of Bushidō”, in: Adriana Boscaro, Franco Gatti and Massimo Raveri (eds.): *Rethinking Japan*. Vol. II. Sandgate, Folkestone, Kent: Japan Library, 318-323: 321.

<sup>26</sup> 内田良平研究会 2003: 『国士内田良平・その思想と行動』。東京：展転社、396。

<sup>27</sup> Pinnington 2008: xlii.





... in reference to our Bushido which is dearer to the Japanese people than their life. ... Bushido is a code of morals the Japanese samurai have practiced for centuries. Its basic principle is chivalry, for it commands us to have sympathy for our beaten enemy。」<sup>40</sup>。そして、内田は亡命者に対する独自の態度を日本国民の「absolute allegiance to the bushido, which places chivalry before every other virtue」を根拠に以下の結論を導く。「Considered from our Bushido, it is but right and proper that the Dutch refuse to surrender the Ex-Kaiser to the Allies」<sup>41</sup>。この記事の中で武士道は歴史的事実として、また武士の間の一般的慣行として記述された（遠く特定されない過去の出来事にもかかわらず）。内田は日本を武士の倫理規範に完全に従う国と描写し、男性性化されサムライ化された日本のイメージに言及する。武士道を「chivalry」と翻訳することで *The Asian Review* の読者にとって武士道は普遍化され、倫理的普遍性の強力な主題をもつ新渡戸の『武士道』に共鳴した。

いくつか記事の中で武士道が「アジア的」とか「大亜細亜主義的」として構成された。

「The Joy of Life in Hindu Philosophy」（1920）で、ヒンドゥー教徒は自己犠牲的な兵士を聖人化することで戦闘での死に荣誉を与えるため「general Bushido morality」をもつといわれる。「People should not regret the death of the brave man who is killed in battles. The man is purged and delivered of all sins and attains heaven。」<sup>42</sup>。1918年の『亜細亜時論』の記事は「Indians are loyal. Indian soldiers are brave. ... [they] uplift the Asian warrior spirit。」<sup>43</sup>と述べる。一年後に同じ著者は「[V]irtues like valor or sense of honor」を欠く日本陸軍将校を嘆き、悪化しつつある武士道の気迫に遺憾の意を

---

<sup>40</sup> Uchida Ryōhei: “Bushidō and the Extradition of the Ex-Kaiser”. *TAR* 1920, 1 (1) (February), 138-140: 138. See also 内田良平: 「日本の武士道より見たる全帝引渡し問題」『亜細亜時論』1920, 4 (4) (四月), 20-25.

<sup>41</sup> Uchida Ryōhei: “Bushidō and the Extradition of the Ex-Kaiser”. *TAR* 1920, 1 (1) (February), 138-140: 140. 同じタイトルで武士道に就いての *TAR* 1920, 1 (2) (March)の「Editorial Notes」を説明する: “chivalry; it is difficult to translate it because there is no exact equivalent in English; it means something nobler and grander than mere chivalry” [sic!], 115-116: 115.

<sup>42</sup> Benoy Kumar Sarkar: “The Joy of Life in Hindu Social Philosophy”. *TAR* 1920, 1 (5) (July), 488-491: 491.

<sup>43</sup> 長崎 武: 「インドの軍備」『亜細亜時論』1918, 2 (10) (十月), 98-103: 103.

表明している。この美德は「singular to Japan's bushido」<sup>44</sup>とみなすべきであるという。だがこれは著者が以前に喚起した「亜細亜武士道」と矛盾する。

Muscles, of which non-communication is the very essence,  
ought never in theory acquire the abstract quality common to means of communication.

And yet ...

MISHIMA Yukio, SUN & STEEL • 1970

#### IV まとめ

この研究は近世武士道の男らしさの神話が、大正時代盛期に黒龍会の機関誌『亜細亜時論』と *The Asian Review* でどう描写され、それが特定の男性優位論において古い創作をどのように共鳴させ、それを「chivalry」と並列させたか、あるいはこの神話を明白に「日本的」と断言する一方で汎アジア主義の「ひねり (twist)」を添える仕方を概観した。黒龍会の「超国家的のナショナリズム」の逆説は一般にその「亜細亜武士道のマスキュリニティ」の構成のうちに反響している。

伊藤の「Japanese masculinities」についての考えに関連して、それを「覇権的 (hegemonic)」をとらえるならば、簡単に割り切りすぎて、むしろ武士道のマスキュリニティの神話をさらに増幅させるのではなかろうか。というのも、日本においては並行的にあるいは同時に、ディスコースとしてはより支配的であった多様な表象が存在したからである。かつて Bolitho は「None of them, samurai or commoner, deserve to have their descendents saddled with so unflattering an image as that presented in the myth of the samurai.」<sup>45</sup>と示唆した。意図せず皮肉にも、武士道とその「男らしい」英雄についての最も明示的な所見は、*The Asian Review* の他の記事の中に表現されている。すなわちつぎのとおりである。「both heroes and bandits are gifted with courage and wisdom, the difference being: that heroes are public robbers honored with a crown,

---

<sup>44</sup> 長崎 武：「青島を回顧して国民に訴う」。『亜細亜時論』1919, 3 (9) (十一月), 23-32: 30.

<sup>45</sup> Harold Bolitho 1984: "The Myth of the Samurai", in: Alan Rix and Ross Mauer (eds.): *Japan's impact on the world*. Japanese Studies Association of Australia, 2-9: 8.

while bandits are private robbers who are condemned.]」<sup>46</sup>。

---

<sup>46</sup> Shinobu Junpei: “International Morality”. *TAR* 1921, 2 (5) (July-August), 471- 476: 472-473. ここに Shinobu は Frederick the Great の“Anti-Machiavel”の随筆を引用する[= Voltaire の 1740 年に出版した „Anti-Machiavel, oder Versuch einer Kritik über Nic. Machiavels Regierungskunst eines Fürsten“]。